

デデキントに哲学を読み込む

那須 洋介 (Yosuke Nasu)

名古屋大学大学院情報科学研究科 博士後期課程

このワークショップの趣旨にどれだけ合致するかはわからないが、本発表では、リヒャルト・デデキントの著作を哲学的な視点から考察する。

デデキントは、著作の中で哲学的な主張を明示的にすることはほとんどなく、彼を哲学者と呼ぶことはできない。しかし、哲学の文献の中でデデキントに言及されることはよくある。古くより、デデキントは、フレーゲ、ラッセルとともに論理主義の代表者としてしばしば語られてきた。また、より近年では、構造主義の文脈にデデキントが位置づけられることもある。実際、構造主義の代表的な哲学者であるジョフリー・ヘルマンやスチュワート・シャピロは構造主義的アイデアのルーツとしてデデキントを挙げている(Hellman [1989], Shapiro [1997])。しかしながら、構造主義者としてのデデキントの立場は、ヘルマン、シャピロといった現代の構造主義のいずれとも異なっているように思われる。エリック・レックは、デデキントの立場を論理的構造主義(logical structuralism)と呼んでいる(Reck [2003])。

本発表は、デデキントの著作——特に基礎論的な二つの著作、「連続性と無理数」(“Stetigkeit und irrationale Zahlen”)、「数とは何か、そして何であるべきか」(“Was sind und was sollen die Zahlen?”)——を考察し、その背景にある哲学的見解を浮き彫りにすることを目的とする。

Hellman, Geoffrey [1989], *Mathematics without Numbers*, Oxford University Press.

Shapiro, Stewart [1997], *Philosophy of Mathematics: Structure and Ontology*, Oxford University Press.

Reck, Erich [2003], “Dedekind’s structuralism: an interpretation and partial defense”, *Synthese* 137, 369-419